

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

売買

翌十月一日の日曜日、宇和島は朝から快晴だった。

樺崎の一角では、大砲の長い影が道ひとつへだてたマンションの白い壁にまでびていた。そのマンションの玄関前におしかけた報道陣が脚立をならべ、取材の人垣をつくったのは午前七時すぎである。一時間後、バトカーに先導され、八台の車が砲台前にやってきた。先頭の四台の乗用車と普通トラック一台はそのまま砲台前を通過して、恵州会病院へむかい、あとの三台が道端に停車した。ドアがひらき、真っ白な半袖のワイシャツにネクタイをかけた男たちと、パンツスーツの二人の女が車外へ降り立ち、整列した。すぐに棒のような一群になって前進をはじめ、わきたつ報道陣の人垣を押し開くと、マンションの玄関へ入っていった。

容疑者の吉田夫妻はこのマンションの住人である。

突然あらわれた捜査員に驚いたが、妻の京子はドナー（臓器提供者）女性との関係がこじれはじめたところから、うすうすこの日がくるものと覚悟はできていた。それで任意同行を求められると、あっさりこれに応じた。しかし夫でレシピエント（臓器の提供を受ける患者）の学は、いきなり踏みこまれたことで気分を害し、あとにしてくれ、と同行を拒んだためにその場で逮捕され、手錠をかけられた。マンションから特別捜査本部のおかれた宇和島署まで車で二分たらずである。夫妻は宇和島署へ到着するまでの間、とぎれることなくカメラのフラッシュをあびつづけていた。いっぽう同じころ、妻の知人で松山市内のアパートに住んでいたドナー女性の菅野美智子も、松山南署に任意同行をもとめられたが、こちらで待機していた報道陣は数人ほどであった。捜査の本丸はなんと、いつでも宇和島恵州会病院である。特捜本部は執刀医をふくめて、病院側が移植手術の前に、臓器売買の事実を知っていたのかどうか。このことの解明に最大の焦点をあてていた。マスメディアにしても同様である。恵州会病院の玄関ロビー前には、樺崎砲台前をこえる数多くの報道陣が、つめかけていた。

恵州会の診察がはじまるのは九時である。日曜日ということもあって、このときロビーに患者はいなかった。当直のため外来受付の窓口には事務員は、手に手に鞆をもち、段ボールを小脇にかかえた大柄な男たちが突然、大津波のようにおしよせてくるのを目にし、思わず椅子から立ち上がっていた。何事がおこったのか見当もつかず、男たちの動きを目でおっていると、まっすぐ受付にやってきた男が、県警生活環境課の者だが、と所属を名乗り、ガラス窓越しに捜査令状を示した。

この日、院長の佐田博と丸山誠医師は休日をとっており、事務局長の長谷部次郎は出張中だった。院内にいた事務職員と数人の看護師がすぐに呼び集められ、院長が病院へかけつける前に捜索がはじまった。警察が押収した品目は次

のとおりである。

病院の見取り図、吉田学（レシピエント・移植患者）の外来診療録と入院診療録、同じく菅野美智子（ドナー）の外来診療録と入院診療録、保険医療機関指定申請書、保険医登録・異動届、宇和島恵州会病院社員名簿、勤務記録表、恵州会理事長・徳川虎男名義の預金通帳十四冊、吉田学の診療報酬明細書（二〇〇五年九月、十月、十一月の三ヶ月分）、同じく菅野美智子の診療報酬明細書（二〇〇五年九月、十月の二ヶ月分）、ドクター月刊スケジュール（二〇〇五年九月、十月、十一月の三ヶ月分）、出勤簿（二〇〇五年一年分）、それに当該ドナーとレシピエントの手術管理台帳の写し。

警察はこれらの押収品から病院側の事件への関与を洗い出そうとした。容疑者逮捕の第一報は昼のニュースで日本中を駆けめぐり、たちまちセンセーショナルな大事件となったが、事犯そのものはいたって単純である。

水産業をいとなむ吉田学が糖尿病による慢性腎不全のため市立宇和島病院へ入院したのは、二〇〇四年二月下旬である。主治医は丸山医師とは別の泌尿器科医だった。見舞にきた仕事仲間が春には恵州会病院がオープンするので、丸山先生に診てもらったほうがよい、と転院をすすめた。それで吉田は四月二日に、開院したばかりの恵州会へうつり、翌日、丸山医師の診察をうけた。

「まかせとけ、必ず治してやるけん」とい

というのが丸山の第一声だった。

すぐに透析をしないといのちが危なかった。腕のシヤントが使えるようになるまで、丸山は緊急用のシヤントを吉田の太ももの付け根につくった。最初の透析の間、怖がる吉田のそばに丸山はずっとつきそい、「大丈夫じゃけん、必ずよくなるけん」と励ましつづけた。腕からの透析を開始したころから体調は改善し、吉田は外泊許可をとって自宅にもどった。それからひと月余り、吉田は病院にはもどらず薬だけで過ごした。この間、「はよ病院へもどってこんど、いけんぜ」と丸山から電話があった。拒んで自宅でぐずぐずしていた吉田はふたたび体調を悪化させ、トイレで意識を失った。救急車で恵州会へ運ばれると、待っていた丸山は、「バカ！ 死んでしまうぞ」と凄惨な形相で吉田を叱りつけた。吉田は透析でなんとかいのちをつないでいたが、尿毒症は急速に悪化していた。移植を考えたほうがええ」といわれたのは、二〇〇四年の十月である。

「他人からもうのは、いけんぜ」

と丸山医師から念を押された夫妻は、身内でドナー探しをはじめたが、県外で働いている息子は仕事が忙しく、またふたりの娘は子育ての最中でドナーになることは無理だった。親戚にも頼めそうなどころにはすべて話してみたが、引き受けてくれる者はいなかった。年が明けた二〇〇五年の春、妻の京子が提

供を決意したが、検査の結果は不適合であった。

絶望の淵に沈んでいた吉田に転機が訪れたのは八月の初旬だった。

京子の昔からの友人が噂を聞き、自ら「ドナーになってもええよ」といったのである。六年前に宇和島から松山へ転居していたその友人は、互いの子どもを通う幼稚園が同じだったことから親しく付き合うようになり、今でも彼女が宇和島へ遊びに来ると吉田の家に泊まる仲である。夫妻はさっそく松山へかけてその友人に会い、動機を確認した。彼女には自分の腎臓をあげる約束をしていた透析患者の母がいたが、移植手術の直前に死亡した。大きな悔いが残り、機会があればドナーになりたい、と思っていたというのである。

「他人はいけん」と丸山から釘を刺されていたので、夫妻はドナーを妻の妹にすることにした。偽るつもりは毛頭なかった。もともと第三者間では原則として生体腎の提供が禁じられている、という法律があることすら夫妻は知らなかったのである。厳密にいうと、全国移植学会の倫理指針では第三者間での提供については、該当する医療機関の倫理委員会で事例ごとに個別に承認をうけることになっているのだが、もちろんそのような知識が吉田夫妻にあるはずもなく、ドナーを妹にしておけば面倒もなく、話はすんなりすすむだろう、と考えただけのことである。

八月十六日、夫妻は丸山医師にドナーがあらわれたことを話した。

「どんな人かえ？」

と尋ねられ、即座に、

「妻の妹です」

と吉田は応えた。

嘘をついた気はなかった。

丸山はホッとした表情で夫妻にむかい、

「奥さんの妹さんなら、もの静かでええ人やろなあ」

というので、京子は照れたような笑みをうかべて応えた。

「はい、人助けがしたいというてくれました」

「ほうかえ、よっしゃ、よっしゃ。一週間後に適合検査をする。詳しい話は

その結果がでてからじゃけん」

丸山は自分のことのようにうれしそうだった。

一週間後、ドナーの菅野美智子は夫妻に連れられて病院へくると、丸山医師に会った。

開口一番、

「うちの腎臓、あげてや」

と美智子は懇願した。すぐに血液を採取し、問題のないことが判明した。結果を聞いて彼女は喜色満面になり、「うちの腎臓、つかってえな」と夫妻に話し

かけ、三人は互いに手をとりあい涙ぐんでいた。九月にはいつて美智子は二度病院を訪れ、丸山医師からともに三十分ほど口頭で手術の説明をうけた。「左脇腹のしたに傷が残る」と丸山が心配すると、「なんちゃ、そんなこと、気にならん」と一蹴した。

手術の前日、吉田と美智子は病院側から求められ、数多くの書類に署名し捺印した。美智子は修学旅行前の女子生徒のように陽気だった。

手術はいつも通り無事に終った。

それからひと月ほど経った十月下旬、美智子が電話で三十万円送ってほしい、と吉田へ遠慮がちに要求してきた。何らかの謝礼をしなければならぬ、と思っていた夫妻はためらうことなく現金をふりこんだ。するとさらにひと月後、主人が入所している介護施設へかのように車があるので、買ってほしいと彼女が再び要求してきた。返事をしぶっていると、車をねだる電話は毎日のようにつづいた。どうもまずいことになってきた、という自覚を夫妻がもちはじめたのはこのころからである。手術後の定期検診ごとに丸山医師に会う機会があったが、夫妻はドナーとの関係がこじれはじめたことを内密にしていた。美智子のほうは日ごとに恩せがましくぞんざいな口をきくようになった。そして年の瀬にはひとしきり吉田夫妻をのしり、ぱったりと電話がとだえた。

年が明けた二〇〇六年一月、こんどは美智子の代理だという男から同じ内容の電話が執拗にかかるようになった。その口調はしだいに激しくなり、二月二十四日、男は怒鳴り脅迫した。

「腎臓代が三十万とはなにごとぞ。なめたらあかんぞ。相場は五百万、海外だと一千万も二千万もする。車と五百万円でこらえてやるから、さっさと払わんかい！」

恐怖にかられた吉田は翌日、宇和島署へ電話をした。腎臓移植をしたが、ドナーの代理を名乗る男から金品を要求されて困惑している。詳しいことは自宅で話したいから出向いて欲しい、と応対にでた刑事に頼んだ。すると刑事は、そのような事件は現在、暑では取り扱っていないといい、暑で調べておrikかえし連絡する、と約束したが、その後、何の音沙汰もなかった。三日後、吉田は松山南署へ同様の電話をした。訴えを聞いた刑事は、それは宇和島署で話してくれ、と面倒そうにいうと一方的に電話をきった。

警察はあてにできない。が、このままほっておくと、面倒なことになりそうだった。吉田は腹をすえ、美智子と直接電話で交渉することにした。このとき、「丸山先生も車ぐらいなら、もらってもええ、といいよるんよ」

と彼女はもつともらしく弁解した。それは出任せで、丸山医師がそのようなことを口にするはずはない、と吉田は確信していたが、美智子の要求をのみ、トヨタの宇和島営業所から彼女が希望する車を届けてもらうことにした。美智

子のもとへカローラが納車されたのは四月二十日であった。

この間、車を要求したことで吉田夫妻との関係がこじれた美智子は、宇和島や松山の知人たちに事情を打ち明けて相談していた。そして宇和島のごく親しい友人にたいしては、腎臓提供の見返りを吉田夫妻に要求するように依頼もしていた。しかしその友人が美智子の望むような行動をおこさなかったため、彼女は夫が入っている介護施設の介護員を代理人にしたのである。このような背景があつて臓器売買の噂はさまざまな尾ひれがつき、松山や宇和島でひろがっていたのである。県警生活環境課では丸山医師が腎移植の全国的な権威であることから、移植学会などの学術団体や医師会に及ぼす影響も十分に考慮にいれながら、検察とも相談して慎重な捜査をつづけてきたのだった。したがって逮捕された三人は、半年以上にわたって捜査当局からいわば泳がされていたのである。

泳がしていたのには、理由がある。

丸山医師の逮捕は、警察の視野にはいっていった。

自宅捜索があつた日の夕刻である。

恵州会病院では佐田博院長の判断で大会議室に報道関係者をいれて会見をひらいた。記者団の前にあらわれたのは院長、丸山医師、それに出張先から急遽呼び戻された長谷部事務局長の三人である。

長机の上におかれたマイクとレコーダーに囲まれ、院長は青白い頬を緊張させ、手にした書面をたんと読み上げた。

「当院といたしましたは、まったく寝耳に水のことで大変驚いております。もちろん、病院側が臓器売買に関与するなどということはありません。当初は患者の妻からの移植を計画しておりましたが、妻の体調不良などで不適合と判断され、そのあと連れてこられた方が患者の妻の妹だということなので、所定の検査をし、十分な同意を得た上で関係書類にご記入いただき手術が行われました。幸い術後の経過も順調で、ドナーもレシピエントの患者さんも退院され通常の生活にもどっておられました。このたび逮捕されたことにつきましては、誠に遺憾であります」

院長は紙面から顔をあげ、記者団を見渡すにつけたした。

「なお事件につきましては現在捜査が継続しておりますので、これ以上のことにつきましてはお応えすることができません」

と、執刀医の丸山へ質問が集中することをけん制した。

しかし記者たちがこれで引き下がるはずはない。すぐにあちこちから質問の声があがった。ばらばらの質問を制するように、最前列にいた中央紙の毎朝新聞社の記者がすつと立ち、病院側は運転免許証や保険証、さらには戸籍謄本の提出を求めるなどして、なぜドナーの身元の裏付けをとらなかつたのか、と訊

いた。

だれもがいただく疑問である。

「家族や親戚といわれれば、病院として信用するほかはありません」

院長は即座に断言したが、記者は、「丸山先生！」と丸山を指名し、確かめもしないで手術をしているのか、と問いただした。

白衣の丸山は腕を組み、下唇をかみしめ、視線は天井へむけたままで黙っている。すぐに院長が補足した。

「ご質問の内容は事務的なことからですから、執刀医にかかわりはありません。そもそも当院だけではなくどの移植病院でも、患者同士の続柄についてわざわざ裏付けを取るようなことはしていません」

「病院の立場はわかりました。しかし報道する側としては実際に手術をされている丸山先生にもお聞きしたいのです。丸山先生、どうなんですか」

と記者は再度、丸山に回答をもとめた。

丸山は組んでいた腕をほどき、右手を白衣のポケットにつっこみ、左手であごの先をつまみながらなお天井をにらんでいたが、記者に食いさがられて、目の前の蠅を追い払うような顔を記者団のほうへむけた。そのふてぶてしい顔へたちまちフラッシュがとびかった。困惑の表情にかわった初老の医師のすがたが、溶接の火花のような光にさらされた。

丸山はぼそっと、つぶやくようにいった。

「医療は患者と医師の信頼関係が第一ですけんなあ。わたしはこれまで、患者を疑ったことはありませんぜ」

丸山の発言をいっせいにパソコンへうちこむ音がやむと、別の記者が訊いた。「売買された臓器だという認識はなかったのですか」

「そんなこと応えるまでもありません。わたしはまったく知らんけん、知っとたら手術はせん」

「警察の発表では三十万の現金と車がドナーへ渡ったということですが、先生はこのことは知らなかった、ということですか」

「わたしは手術をしただけじゃ」

丸山は白衣のポケットから右手をだし、机上に両方の手をおくと拳をつくった。

記者団のなかほどで、若い女性が質問した。

「ドナーの女性は傷口が大きくて後悔している、と話していますか」

「説明は十分にします。みんな納得してもらったとるけん、それから手術をとる。これまでたくさん手術をしてきたが、そんなこと、聞いたことはありません」

と丸山は応え、くびをぐるりとまわした。

「たくさんということですが、惠州会での腎移植数はこれまで何件ですか」と質問がでて、長谷部が書類をめくり応えた。

「七十八例になります」

「そうですか、一年半あまりで七十八例というと、ひと月に四例から五例の移植手術が行われている、ということになりますね。ひとりの医師がこなす移植の手術数として、全国的にみれば異常に多い件数に思うのですが」

丸山が黙っているの、院長が応えた。

「ひとりの医師というのは、丸山医師のことを指していると思いますが、そうだとしたら正しくはありません。移植手術はチーム医療です。ひとつのチームという風にとらえて下さい。チーム医療として、七十八例は決して多い数ではありません」

隅の方で手があがった。テレビ局を名乗った記者が質問した。

「丸山先生にお尋ねしますが、日本の透析技術は世界でも最高レベルだといわれております。その透析という選択肢があるのに、先生の場合、まず移植ありき、になってはいないでしょうか。七十八例のなかで、もともと移植よりも透析を続けたかった、という患者さんはいなかったのでしょうか」

そのとおりだ、という顔で記者団が丸山を凝視した。

丸山は拳で机上をひとつたたくと、喧嘩でもうるように声を高めた。

「そりゃあんだ、透析をすすめることもありますわな。じゃけどなあ、わたしのところにくる患者さんは、ながいこと腎不全で苦しんで、透析から抜けだしたいという人ばかりじゃけん、みんな移植を希望する」

「先生が一方的に移植をすすめる、ということはありませんか」

「あんな、誤解したらいけないぜえ、わたしは患者さんが元気になるのがうれしいから移植をしとる。それだけじゃ」

「こんどの移植も一方的ではない、ということですね」

「そんな愚問に答える必要はありません」

丸山の拳をにぎる手がふるえた。

「愚問なんかじゃありません。ちゃんと応えてください」

「バカなことを訊くな！」

重ねて追及され、丸山は怒気をふくんだ声で一喝した。

記者はしつこくたたみかけた。

「きつと、警察からも同じことを訊かれますよ」

「うっ……」

丸山は目をむき、記者のほうをにらみつける。

院長がひきとった。

「当院ではどのような場合もインフォームドコンセントを十分に行い、患者

さんの納得のゆく治療に努めています。移植するかどうかも当然、患者さんの判断にゆだねられています。一方的などということはありません。ただし、これはやがて明らかになると思いますのであらかじめお話ししておきますが、丸山医師の場合はこれまでインフォームド Consent はもっぱら口頭でおこなっており、患者さんが納得のゆく説明を受けたことを示す書類が十分にそろっていないことは事実です。これからはこうした書類上の形式的な不備がないように努めてまいります。ところで、冒頭に申し上げましたが、捜査中でありますから、今日のところ、会見はこれで終わらせてもらいます」

院長は丸山をうながし、席を立とうとした。会場がざわついた。

「ちよつと待つてくださいよ」

会場のうしろのほうで太い声があがった。みんなの動きがとまった。

記者団の頭越しにとんだ質問が丸山をとらえた。

「移植数が七十八例ということですが、確認させてください。それ、みんな生体腎移植ですか」

丸山と院長は立ち上がったまま、互いに顔を見合わせた。

ふたりが戸惑う気配が会場へつたわり、記者団もしんと静まり、院長の発言に注目した。

「ご承知のように当院は日本臓器移植ネットワークにはいつておりませんが、死体腎の提供はうけておりません」

「すると、七十八例は全部、親族間の移植ということですね」

「そういうことになります」

「この事件と同じように、これまでの身元確認は患者の申告だけですか」

「身元確認の手続き上の問題につきましては、法律はもとより学会のガイドラインにも抵触してはおりません。しかし今回のようなケースがありましたので、当院では早急に調査委員会を立ち上げ、過去の移植例につきましても調査をいたします。また今月もすでに二例の移植が予定されておりますので、院内に倫理委員会を組織して一例ごとに精査し検討することにしました。こちらからは以上です」

と、院長は会見の打ち切りを宣言し、丸山と事務局長をうながし会見場から退出した。

四国の片田舎でおこったこの臓器売買事件は、ニュースの少ない日曜日ということもあって、どこのテレビ局も昼夜ともどもトップニュースで報じた。くわえてこの日は移植推進月間の初日でもある。メディアにとって、ニュース価値の高い大きな事件であることに変わりはない。どこのメディアも事件性をさらに掘り下げる報道体制をしいた。

